授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1451 号

Adverse effects of dry eye disease on quality of life among university staff in Japan

(ドライアイが大学職員のＱＯＬに与える影響)

當仲　香（とうなか　かおる）

博士（医学）

論文内容の要旨

ドライアイ（dry eye disease，DED）は世界的にみても最もよくみられる角結膜上皮疾患である。患者を対象にしたこれまでの調査では、DED 患者ではメンタルヘルスを含めた生活の質（quality of life，QOL）が低かったという複数の報告がある。ドライアイ患者数は症状はあるが未治療である患者を含めると非常に多いと推測されるため、DED 症状による QOL の低下は、一般社会における重要な健康問題であると考えられる。しかし、未治療集団を対象とした DED 症状の QOL に対する影響についての調査は、数例の調査を除き、されていない。そこで、今回の研究は、日本において、ドライアイで受診したことがない大学職員を対象に、DED 症状と QOL の関係を調査した。

調査は、健康診断を受診した大学教職員 361 名のうち、同意が得られた 190 名を対象に、ドライアイのスクリーニングに用いる Schaumberg の 3 つの質問（眼の乾燥、異物感、DED 診断歴）を行った。このうち、過去にドライアイと診断されたことがあると回答した 27 名を除いた 163 名（男性 99 名　平均年齢 46±11 歳、女性 64 名　41±10 歳）を分析対象とした。眼の乾燥、または異物感があると回答した 68 名を DED 群、ないと回答した 95 名を non-DED 群とした。QOL は SF-36 を用い、精神的側面、身体的側面および役割/社会的側面の QOL サマリースコア（それぞれ MCS, PCS および RCS）を算出し、DED との関連をみた。ライフスタイル調査は質問紙を用いた。

分析対象 163 名中、DED 群は男性 36 名（36.4%）、女性 32 名（50.0%）であった。コンタクトレンズ使用者は、男性より女性に有意に多かった（$p<0.001$）。DED 群における主観的な見え方、喫煙習慣、飲酒習慣、運動習慣、高血圧、糖尿病、高脂血症および精神疾患の有無に有意な性差はなかった（$p>0.05$）。DED 群の QOL サマリースコアは日本人の標準値に比較し男女とも低かった。また、男性では、MCS スコアが DED 群は非 DED 群より有意にスコアが低く（$p<0.01$）、ステップワイズ重回帰分析では、DED の有無は男性の MCS において、有意な関連がみられ、DED の存在と有意な負の関係がみられた（$p<0.05$）。

今回の調査結果により、未治療の集団であっても、DED 症状はメンタルヘルスに関連する QOL に影響を与えていることが考えられた。DED 症状は眼疾患としてだけでなく、メンタルヘルス問題としても考えるべきであろう。DED と QOL の関係についての性差については、今後検討が必要である。